長野大学紀要　第30巻第4号　43―50頁（273―280頁）2009

生命倫理学から安全・安心の議論をつくる試み

An Attempt to Discuss Our Security and Feelings of Safety from the Viewpoint of Bioethics

徳　永　哲　也*
Tetsuya TOKUNAGA

1．はじめに

「安全・安心」という問題は倫理学のテーマになりうるだろうか。「戦争と平和」「テロリズムと貧富差」といった話題なら政治学や国際関係論のテーマになるだろうし、「環境リスク」や「食の安全」なら環境学や農学のテーマになるだろう。「老後の安心」や「健康と保険制度」なら厚生経済学や社会福祉学のテーマになるだろう。倫理学、特に生命倫理学が「安全・安心」の議論をどう射程に入れるかは、私にとってここ数年の関心事であった。

そんな折、2006年日本生命倫理学会第18回年次大会の全体シンポジウムは「戦争・テロは生命倫理の課題か」というテーマを掲げた。生命倫理学者一般にとっても、「戦争・テロ」を議論の対象とする時代になったのである。私はこのシンポジウムで特定質問者を依頼され、4名のシンポジストの提題に対して、優生思想史などの観点から1問ずつ質問した。「戦争と生命倫理」というテーマに沿った議論形成に、多少なりとも貢献できたようである。

こうしたテーマを私自身の教育と研究の課題と考えてあたためてきた企画が、長野大学2007年度総合科目「安全・安心を問いなおす」である。2007年度後期の地域開放講座として実施に至り、学生のみならず多くの地域民の聴講も得ることができた。テーマがタイムリーだったのと、私自身が幸いにも人脈に恵まれて興味深い問題提起をしてくれるゲスト講師を揃えることができたことが成功の要因だったと言える。

本論文では、この講座の構想・実行過程を紹介しつつ、生命倫理学者として「いのちの論議」をどうつくれたか、どのような課題が見えてきたかを報告する。

2．「いのちを考える」講座から「安全・安心」をキーワードとした新構想へ

哲学・倫理学者として私は、従来から哲学史のほか生命倫理や環境倫理を研究し講義にも反映してきた。学生相手の講義のみならず市民講座や高校生向け授業でも、いのちのあり方と共同体倫理をテーマとすることは多かったが、近年は特に、いのちを守り育てる土台としての「安全・安心」をからめた議論を求められるようになった。

その背景には、国際的には2001年9月以降のテロリズムをめぐる恐怖があり、国内的には小学校への凶器所持乱入事件を代表例とする「犯罪社会化」への不安、さらには社会保障制度への不信や医療崩壊への懸念がある。そこで私が問題と感ずるのは、何かにつけて「治安・管理」が目ざされ、「予防」が強迫観念のように要求されるという風潮である。アメリカの対テロリスト軍事行動に対しては、まだ批判の目があるが、日常での

*環境ツーリズム学部教授

「不審者」監視だとか「心の闇」への心理カウンセリングだとか、さらには高齢者の「介護予防トレーニング」といった政策に対しては、無批判に受け入れてしまいかねない時流が出てきている。そこを私は問題視し、「予防」思想が強者の論理で推進されやすいこと、困難を受け入れつつ解きほぐすのではなく「異分子」切り捨てになりかねないことを、今回も改めて訴えたいと考えた。

「倫」「理」とは「人間集団」の「筋道」であるが、変化のスピードが緩やかで地域地域が閉ざされていた時代には、格差や不平等があってもメスが入ることは少なかったし、異分子は発生しにくく、発生しても「村の掟」で目立たずに処理された。今は異文化理解が当たり前のように叫ばれ、良くも悪くも「内向きの議論」だけでは事態を解決できない時代である。哲学（哲学者）が、その中でも実践哲学・社会哲学に焦点を当てる倫理学（倫理学者）が、この時代に果たしうる役割があるとすれば、一方向に流れがちな世相に別の観点を与え、「倫」としての共同性を考え直す手掛かりを提供することではないか。この時代潮流の中で、こうした視点から、哲学者とくに生命倫理学者として何をすべきかと改めて考えたとき、今回の地域開放講座の立ち上げに思い至ったのである。

長野大学の地域貢献として、そろそろ次の開放講座案を私が考えてもよい時期にあった。2006年生命倫理学会大会シンポにも触発されつつ、「いのちを考える」講座を「安全・安心」をキーワードに掲げる中で批判的に考察できるゲストとの討議にしようと、企画立案したのである。

「別の観点を与える」という趣旨からすると、ある意味では「時流への反逆者」を意図的に外部講師として起用することになる。私がリストアップした講師陣は、個性が強すぎると見られるのではないかと少し心配したが、幸いにも受け入れられ、企画は実現する運びとなった。現実には、総合科目を担う教員が最近は減っており、提案して運営まで買って出てくれる教員がいるだけでも歓迎するという現状もあったが、とにかく私の目論みが2007年度カリキュラムに採用されることになった。

3．過去に手掛けた地域開放講座と地域事情

長野大学では、この「総合科目」という名称の地域開放講座が1990年度ごろから存在していた。毎年、「国際化」や「情報」といったおおまかなテーマを決めて２～３名の学内教員が企画チームを組み、学内教員プラス外部講師で１人１～２回のリレー講義を行うという伝統になっていた。私が着任したのは1999年度であるが、先輩教員からすぐに2000年度講座の企画立案を相談された。「生と死」をテーマとした１年通しの講座を漠然と思い描いていたが、自分１人では具合的なメニューが作れないので、生命倫理学者が来てくれたのなら一緒に考えてほしい、とのことだった。外部からの講師を私の裁量で増やしてもよいとの条件で引き受け、現実には私が主に考えるプランづくりとなった。全体のストーリー構想、講師との交渉などに手間はかかったが、こちらの発案をほぼ受け入れてもらえるという点では、やり甲斐のある作業であった。

こうして2000年度には「いま、生と死を考える」という講座を企画運営した。好評を博して続編への期待が地域からあったので、2004年度にも「いのちの対話――ふたたび生と死を考える」という講座を企画運営した。選んだ講師と依頼した演題を並べるだけでも企画者の主張を浮き彫りにできるので、あえて紙幅を割いてここに一覧表を示す。なお、講師の肩書はその当時のものである。

《2000年度　「いま、生と死を考える」》

４月13日　ガイダンス　　学内講師全員
４月20日　導入的総論――科学技術・情報化時代における生と死の倫理
　　徳永哲也（本学助教授）
４月27日　生まれようとする命を選別しないで
　佐々木和子（京都ダウン症児を育てる親の会）
５月11日　共生とケア
　　川本隆史（東北大学教授）
５月18日　死に方と死に場所
　　矢嶋嶺（本学教授）
５月25日　元気な車椅子――障害者となっての後

半生　横本勝（同志社高校教諭）
6月1日　今の世に生まれ育つことの苦難——医療にからめとられる生　山田真（小児科医）
6月8日　からだの生と死
鈴木宏哉（本学教授）
6月15日　新たな健康観と地域医療
池田忠（小川村国保診療所長）
6月22日　フェミニズムから見た生と死
古田睦美（本学助教授）
6月29日　都合のよい死・屈辱による死——安楽死について　立岩真也（信州大学助教授）
7月6日　死の科学論・文化論——脳死・臓器移植の陥穽　小松美彦（東京水産大学助教授）
7月13日　総括的討論（パネルディスカッション）　前期学内講師全員
9月28日　デス・エデュケーション——死への準備教育　小高康正（本学教授）
10月5日　いのちの行方
高橋卓志（神宮寺住職）
10月12日　子どもの死　中島豊（本学助教授）
10月19日　現代人にとっての生と死——臨床社会心理学の立場から　小川憲治（本学教授）
10月26日　死をめぐって——作家たちの思いから
佐々木涇（本学教授）
11月9日　芸術と死　窪島誠一郎（無言館館主）
11月16日　良寛の死生観
圓増治之（愛媛大学教授）
11月30日　ターミナルケアと精神保健
小片富美子（本学教授）
12月7日　死別の悲しみ
藤原正子（本学助教授）
12月14日　長野いのちの電話——電話相談活動の実際（座談風まとめ）
渡辺恵（長野いのちの電話）

《2004年度　「いのちの対話——ふたたび生と死を考える」》

4月15日　総論——生命倫理のダイアローグ
徳永哲也（本学助教授）
4月22日　薬害エイズ裁判とその後
川田龍平（松本大学非常勤講師）
5月6日　遺伝子の時代の希望と危険性
粥川準二（医療ジャーナリスト）
5月13日　人工生殖医療に投じる一石
根津八紘（諏訪マタニティークリニック院長）
5月20日　操られる私たちのいのちとからだ
中野冬美・佐々木和子
（優生思想を問うネットワーク）
5月27日　マスコミはいのちの現場をどう伝えたか　織井優佳（朝日新聞記者）
6月3日　今日の老い、病と死
河野伸造（本学教授）
6月10日　いまどきの子産み、いまどきの子育て
梅村浄（梅村こども診療所長）
6月17日　現代史の中のいのち——歴史の事実から　小俣和一郎（現代医療史研究家）
6月24日　心の病といのち——「心の生と死」
杉山崇（本学非常勤講師）
7月1日　地域で育むいのち
五十嵐雅浩（本学助教授）
7月8日　「福祉」「共生」の落とし穴
篠原睦治（和光大学教授）
9月30日　デス・エデュケーション（いのちの教育）を考える　小高康正（本学教授）
10月7日　命の誕生そして性教育の現場から
松川つぎ江（助産師）
10月14日　食のつながりといのち——他のいのちをいただく私たちのいのち
横山孝子（本学助教授）
10月21日　いのちと向き合う子どもたち
石原剛志（本学講師）
11月4日　死を考える——仏教ホスピス・ビーハラとは　滋野真（浄楽寺住職）
11月11日　いのちと音楽がふれあうとき
森川めぐみ（長野県音楽療法研究会）
11月18日　医療の中のいのち——移植・障害・がん　小林信や（東長野病院院長）
11月25日　ターミナルケアと精神保健——ある知的障害者施設の事例　上平忠一（本学教授）
12月2日　生命、輝く、とき——ターミナルケアの現場から　今城慰作（愛和病院チャプレン）
12月9日　リヴィングウイル
宮尾陽一（軽井沢病院院長）
12月16日　看取り——いのち尽きるその時まで
高遠三和（本学講師）
1月13日　いのち（生と死）を考えるということ

吉田俊雄（兵庫・生と死を考える会常任理事）

2000年度、2004年度とも、前期7月までが私のコーディネート、後期9月からが共同企画者小高教員のコーディネートであった。講座の成果は、企画運営者の編集の下、講師陣の共著としてそれぞれ残されている。また私個人は、2001年度と2005年度の『長野大学紀要』に報告文書を残している。講座は両年度とも好評で、学生150～250名、社会人100名前後という、他の年度の同様の科目よりずっと多数の受講者を集め、新聞にも取り上げられた。

私は関西の出身で、長野県は初の赴任地だったが、この地で「いのち」を語るには次のような特徴的な背景を踏まえておく必要があると思ってやって来た。

第1に、長野が健康長寿県であること。県別平均寿命は、男性は第1位、女性もベスト5に入っている。寝込んだ晩年を差し引いた「健康寿命」が特に長く、1人当たりの医療費が安上がりで済んでいることを誇りとしている。

第2に、地域医療先進県としての歴史を築いてきたこと。「地域医療の神様」と称される、佐久総合病院の若月俊一や諏訪中央病院の今井澄、鎌田實などの活躍は、全国マスコミにも取り上げられ、語り継がれている。そうした志を継ごうという医療者や地域民は、今も諸市町村に存在する（小川村の池田忠医師が、地元密着で育ててきた医療が市町村合併でできなくなったとして村を離れる、という残念な事例もあったが）。

第3に、高齢者福祉において先進的な事例を数多くもっていること。武石村の「ともしび」や真田町の「アザレアン真田」は、評価の高い福祉施設として全国に情報を発信しており、見学者・研修希望者が絶えない（両町村は最近、上田市に広域合併され、今後の行く末が注目されるが）。

第4に、諏訪マタニティークリニックの根津八紘の生殖医療における活動と発言。彼には、私とは意見が異なる部分が多いことを認識しながら注意深くアプローチし、2004年度の講座に講師として来てもらえることになった。講義の壇上で、また終了後の対話で、私との議論は対立したが、最低限のコミュニケーションの橋は架けることができた。

こうした特殊条件を踏まえつつ、その長所を評価しながらも批判的考察も加える議論を組み立てることには、それなりに気を遣うところもあった。ときとして、長野県民の「当たり前」に疑義を呈する場面も出てくるからである。語り続けるための信頼関係を保ちながら新しい議論の地平を地域民と共有する工夫は、2007年度講座においても心がけていたことであった。

4．2007年度講座の進行と反響

地域開放講座「総合科目」は、2005年度から色合いが変わった。主に後期に開かれる半年講座となり、学部教務委員会企画として作られるものが多くなった。従来の個人やグループからの発案が、運営負担の大きさもあって出されにくくなったからである。私も役職などが多忙で個人企画は難しかったが、過去の「実績」から要請もあって、生命倫理の議論を「安全・安心」と結びつける形で、想定していた時期より前倒しで2007年度後期に企画することになった。2005年度から規模縮小で宣伝もあまりされず、社会人向けというよりは学生の講座を社会人も聴講できるというトーンになったので、受講者数は学生約100名、社会人約20名であった。それでも、前後の年度の同様の講座よりは社会人受講者数はずっと多かった。社会人には1回のみの受講も申し出があれば認めたので、例えばアルフォンス・デーケン講師の回には、約50名の社会人が教室前方の列を埋め尽くした。

ここで、この2007年度講座の一覧表も示しておく。後期のみの全12回講座で、企画運営者は私1人である。

《2007年度　「安全・安心を問いなおす」》

9月27日　総論――治安・管理への問いなおしと生命圏安全保障　　徳永哲也（本学教授）

10月4日　「靖国問題」と日本の安全　　高橋哲哉（東京大学教授）

10月11日　イラクと日本、世界と日本、真の安全とは　　橋田幸子（戦場ジャーナリスト・故・橋田信介夫人）

10月18日　日本と世界の安全にとっての中東

酒井啓子（東京外国語大学教授）
10月25日　平和学がめざす安全
岡本三夫（広島修道大学名誉教授）
11月８日　グローバリゼーションとフードセキュリティをめぐって　安井幸次（本学教授）
11月15日　安心して死を迎えるために――デス・エデュケーションの視点から
アルフォンス・デーケン（上智大学名誉教授）
11月22日　果たして安心？これまでの暮らし方と健康
横山孝子（長野大学地域共生福祉研究所）
11月29日　人は自分をどこで支えているのか――冤罪事件での虚偽自白の心理から
浜田寿美男（奈良女子大学教授）
12月６日　医療・福祉とこころの安全
藤本豊（東京都中部総合精神保健福祉センター）
12月13日　「安心づくりと心の管理」への問い
小沢牧子（社会臨床学会運営委員）
１月10日　健康と安全と福祉と安心
鷹野和美（本学教授）

私が企画意図を伝える総論をしたうえで、第２～５回は「戦争と平和」というくくりで世界と日本の安全を考える局面、第６～８回は身の回りの生活から安全と安心を考える局面、第９～11回は心理カウンセリング批判も伴いながら不安社会を考える局面とし、最終回で長野県の医療・福祉を見つめなおそうとした。私は毎回出席し、90分授業の最後の10～15分をいただいて、全12回の脈絡を考えた質問を講師に投げかけ、フロアも交えた討議を行った。

反響は上々と言える。地元の信濃毎日新聞は、第１回の翌日に、「例えば犯罪抑止のため監視カメラを設置するなど、現代は不安や危険への予防線を張ることに懸命。しかし、不安があることを前提としてそれを受け入れていくことが本当の人間社会ではないか」という私のコメントを入れて、大きく取り上げてくれた。第２回以降も口コミで広まり、社会人や同僚教員の臨時聴講が続出した。聴覚障害学生が１人いてそのための要約筆記ボランティアを務めた社会人は、「私自身が聞き入る講義ばかりで、むしろお引き受けしてラッキーでした」と最終回に礼を述べてくれた。

学生相手には単位認定という作業があるので、２～３回に１本ずつレポートを書かせている。例えば１本目のレポートでは、高橋講師の「靖国問題」に対して、現代史を十分には学んでいないと思われる学生たちが、「靖国神社という存在の意図がよくわかった」「命を国に捧げる思想がつくられる危険性を知った」などと書いてくれて、予想以上に教育効果を生んでいると判断できた。高橋講師とは、「靖国と言って今の若者はすぐわかるのか。どのレベルから始めて90分でどこまで話せばよいか」と事前に綿密な打ち合わせをしたのだが、この準備が適度な成果につながったようである。

５.「安全・安心」というテーマと生命倫理

実は、私が「安全・安心」をテーマとした企画を立てて講義したのは、2007年度が初めてではない。2001年９月11日の同時多発テロの直後、2002年度開放講座案の相談を持ちかけられたとき、「今回は全面協力する余裕はないが、部分的な企画と講義担当なら」と答えて「いま安全を問う」というコーナー企画を立てた。そして、沖縄基地返還訴訟に関わっている旧知の弁護士を招いて、「日本の安全を沖縄から考える」という講義をしてもらった。私自身も「いのちの安全保障」と題して最終回を担当し、日本と世界の安全問題を生命倫理・哲学から俯瞰する総括講義を行った。

2006年度の日本生命倫理学会シンポは「戦争・テロは生命倫理の仕事か」と問うたが、私は今この問いを、「安全・安心は生命倫理の課題か」と拡大翻訳して自らに問いかけている。そして、「安全・安心問題を治安管理方法の議論にしてしまわない方向で考えるのが生命倫理の責任だ」と答えようとしている。

特に哲学を研究してきた立場で言えば、人の生き死にという根本問題を包括性・普遍性をもって語るのが哲学者の役割だと考えている。私自身にそこまでの素養があるかは別である。それでも哲学者には、こうした問題への議論をコーディネーターとしてまとめる役回りがあるのではないか。諸々の専門学問や実践現場からの声を引き出し、つなぎ、いくつかの原理的ポイントを指摘する任務があるのではないか。私が労苦を厭わず何年か

に一度は地域開放講座の企画運営を買って出るのも、こうした認識があるからである。

哲学から生命倫理学に入ってきた者としては、「いのち」から「安全」さらに「安心」というテーマは、十分に連続して見える。つまり、いのちはいのち単独の機能的存在物ではなく、生きるという営みの継続そのものであるから、その継続の環境保障と精神的安定がカギになると考えられるので、いのちの議論は安全・安心の議論と親和性をもつと見える。そして、戦争やテロが生命への最大の脅威であるなら、それらを政治学や国際関係論の文脈で語る以前に、いのちの哲学として語るべき部分は十分にあると思える。

そこでの生命倫理学者の役どころは、例えばリスクマネジメント論に埋没することではないと考える。むしろ、そもそもの「人間論」から人倫づくり、いのちを支え合うコミュニティづくりを論じ、そこで紡ぎ出される理念をまず確認してから、技術や制度を整える方向性を批判的に考察することが使命なのではないか。

2007年度開放講座の後半では「不安社会」や「こころ」といったテーマを扱ったが、やはりそうした視点から論じている。つまり、「不安」を「危険分子」排除や心理カウンセリング充実といった技術的対策で解消しようとするのではなく、不安を抱えやすい人間本性を了解しあい、いたわりあう議論をつくったうえで、それでもこぼれ落ちる部分があればどうするかを前向きに考えあう「磁場」を形成したいと考えているのである。

私がこの先に見据えているのは、精神医療や心理療法や脳神経科学をも相対化していく倫理的批判力の構築という課題である。――「例えば、大切な伴侶に先立たれて打ちひしがれている人に、脳治療で明るい気持ちにさせることを、われわれは選ぶのだろうか。むしろそこで必要なのは、死別の悲しみはしっかりと受け止め、人との交流や共感によって時間をかけてゆっくりと立ち直ることではないか」――拙著『福祉と人間の考え方』の150頁で私はこう述べた。平和づくり、安全・安心づくりを語るとき、経済復興や技術対策の話に終始するのでなく、ましてや「悪いもの」を「除去」すればよいと考えるのでなく、根底的な「人間の弱さや迷い」をあるがままに見つめて上手に付き合う方途を編み出す形で取り組みたい、と私は常々思っている。

「安全・安心」は時代のキーワードになりつつある。しかしその注目のされ方もやはり、「対策を万全に」という方向になりがちである。私は、例えば食品の安全や先端医療の安全に技術的管理が不要だと言っているのではない。ただ、どんなバランスで人間は納得して生きていけるのかという人間論的展望がないと、技術高度化と欲望再生産の果てしない競争になるだけではないか、と警告を発しているのである。

6．大学と地域と生命倫理

生命倫理の議論を「安全・安心」という時代のキーワードとからめて講義に乗せるという実践報告を、その経過や意味づけも含めて述べてきたが、「地域開放講座」という存在様式についても言及しておこう。

まず、この2007年度講座、さらには2000年度講座と2004年度講座も振り返って感じるのは、若い学生にとっての社会人受講生の存在意義である。この種の講座で私はいつも初回の冒頭に、「学生諸君は社会人受講生の姿をしっかり見よ。そして学ぶことを最優先できる身分のありがたさを思い知れ」と呼びかけている。実際、前のめりで耳をそばだて質問も積極的にする社会人の姿勢は、学生に居ずまいを正して聴く緊張感を与えている。学生ばかりの授業と比べて、受講態度はよくなる。戦争体験のある高齢者が講師に戦争と平和に関する質問をするのを聴いているだけでも、大いに刺激になっている。

また、最近の若者は、相手が高名な講師であっても知らない場合がある。2004年度に招いた川田龍平講師ですら、18歳の若者には記憶にない人物となっていた。しかし、社会人たちが講師に注ぐ視線には何か重要なものを感じるらしく、例えば2007年度のデーケン講師の回に飛び入りの社会人受講生で教室が満杯になるといった状況を目の当たりにすると、自分たちが知るべきことがここにはあると覚悟するようであった。

他方、地域の社会人にとっても、このような開放講座が大学にあることは意義深いようである。

大学は今や生涯学習の場であり、世論形成にもリカレント教育にも重要な役割を果たすべき地域の知的センターである。特に長野県のように大学数が少なく市民教育機関が他にない地方では、その存在は貴重である。私もこの開放講座以外に社会人ゼミを開いたり、市民講座の招きに積極的に応じたりしてきたが、おかげで地域事情もわかり、学問研究の還元方法も磨きつつある。私の「常連客」とでも呼べそうな人たちも出てきて、この地で働いているという実感と責任意識を新たにしている。

こうした環境を受け止め、より生かす形で講座を企画するといった知的営為は、これからの大学人にはいっそう求められる貢献活動であろう。私のような哲学者には、健康にすぐ役立つような医学的な助言はできないし、家族を介護するノウハウを教える技術もない。ただ、根本理念から諸問題を統合的に捉える一つの見方を提示することはできるし、先にも述べたコーディネーターとして諸部門をつなぐ役割は果たしうる。私の現在の知見と技量でその資格が十分あるかはわからないが、「ああ言ってくれたおかげで話がスッと胸に落ちました」と感謝される場面は多々あるので、私の言説でも多少は役に立っているようである。

私が常に心がけているのは、物事を表からだけでなく裏からも見ること、議論を他の専門分野とも関連づけられるように開いていくことである。一哲学者としての真理観や正義観も語ることはあるが、押しつけにならないように気をつけているし、どの言説でも議論全体の中で相対化できるように位置づけている。

今回の開放講座を運営して改めて思ったのは、「生き死に」や「倫理」を世代をつないでともに考えることには大きな意義がある、ということである。若い学生が高齢の社会人受講者の言動から、生き死にの実感を教えられたり、戦争の歴史を書物や映像とは違う体験として示されたりすることには、教員がなす教育を越えた価値がある。また、中高年の社会人にとっても、若者の無作法ながらも素直な眼差しは、自分の人生を捉え返し、何を残せるかを考えるきっかけになっているようである。

この講座は、学生のレポートなどの反応を見ても、まずまず成功したと見える。しかし、「新たな視点を得られて有意義だった」という反応の先に何を築いていくかは、これからの課題である。講座の進行過程でも、質問するのは社会人ばかりで学生は討議にまでは参加しない、という傾向が見られた。議論を形成していくには、例えばゼミナール形式を部分的に取り入れるなどが考えられるが、諸条件からそこまでつなげられてはいない。

私自身も、時流を批判する観点を提示することはできても、本物の対案を出せているわけではない。「その先をどうするのか。“哲学者”ならば不安と迷いの中で思索することは得意だろうが、それでは安全装置を早く欲しがる“ひ弱な人間”に寄り添っているとは言えないのではないか」という問いかけを、自分自身に向けている。生命倫理は、ある側面では医療批判としてここ数十年展開してきたが、その次のステップを求められているのだと、肝に銘じている。

7．いのちの論議の「開放」と「留め金づくり」

「いのち」というテーマは、ある意味では取っ付きやすい。祖父母や親の看取りは多くの者が経験するし、人生のカベで生き死にの意味を考える場面は結構ありそうだから、「いのち」については何らかのレベルで誰もが一家言をもちうる。答えは一つに定まらないことが多いから、老若男女の誰でもそこそこの議論はできる。そうした議論の「開放」は、今回の地域開放講座でも一定の形をとることができた。

しかし、「いのち」というテーマは、多くの人の情に訴えやすいだけに、感情レベルで拡散したままの議論に終わる可能性が高い。その人なりの思い入れがあるならそれでいいではないか、と評価を避けたまま複数の選択肢が投げ出されて、あとは各人が勝手に選ぶしかない、という話で散会になりやすい。そうした「自由さ」を否定するわけではないが、自由は「弁が立ち、腕がふるえる者の自由」「金と地位のある者の自由」に陥りやすい。技術進歩で選択肢も環境も変わりつつあるこの時代には、もう少し議論を「回収」しておくべきではないか。つまり、どことどこは踏み外す

と弱者を追い詰めるような負の財産になってしまうかを留意し、ある箇所では議論を収束させておく「留め金づくり」も必要ではないか。

例えば、「長野県でいのちを語る背景」という話で言えば、ここにはPPKという「県是」がある。ピンピンコロリすなわちピンピンと健康なまま生き延びて死ぬときはコロリとすぐ死ぬのが理想だ、というのである。「健康寿命」を誇りとする長野県民らしい思想ではある。しかし、この思想は一歩間違えば、病気や障害の受容を一切拒否し、要介護者を敵視するような排除主義に陥る。関西の障害者団体の会合などで長野県のPPK思想を紹介するとすぐにこの負の側面に話が及ぶのだが、長野県でそこを問題視すると「非国民」ならぬ「非県民」扱いされかねない。こうしたPPK思想批判への反発を上手に受け止めつつ、障害者問題やALS患者問題、尊厳死や安楽死、優生思想をも視野に収めた冷静な議論を展開することが、総合的な倫理学者の「留め金づくり」への貢献であろう。

また例えば、今の日本社会で代理出産が話題になるとき、根津八紘と向井亜紀がテレビに登場した翌週の世論調査では代理出産肯定派がぐっと増えるという流動状態がある。腹は借り物でOKだが精子・卵子ドナーには否定的で「血縁信仰」が強いという、日本の世論の傾向も出てきている。いったい代理出産の何が問題なのか、「産んだ女性をまずは実母とする」という法律を先進諸国があえて設けているのはなぜか、等々について一時の感情だけではない冷静な議論を、知識整理もしながら「留め金」として示す必要があるだろう。

8．結語

いのち、医療をめぐる議論、そしてそこから安全・安心に言及する倫理的議論は、さかんに行われているようでも実は部分的、局所的であり、感情論に流されているものも多い。マスコミの取り上げ方は、どうしても断片的で、扇情的効果を生みやすい。例えば「混合診療不認可に裁判所が疑義を呈した」という報道が2007年11月にあったが、事態の一面をセンセーショナルに取り上げただけで、混合診療を認めた場合のデメリットも慎重に比較考量する記事は、その時点では出なかった。

こうした問題を、知識的にも補いながらオープンにつなぎ、議論のポイントを提示していく役割が、私たち生命倫理の研究者に求められていると考える。研究者間で哲学や医学や法律学などを架橋する営みは、生命倫理学会でも進められているが、その議論をわかりやすく一般社会に「見せる」努力と工夫は、もっと必要なのではないか。私が時々に開放講座を企画するのは、その必要を感じればこそである。

［参考文献］

徳永哲也　『たてなおしの福祉哲学』　晃洋書房　2007年
『はじめて学ぶ生命・環境倫理』　ナカニシヤ出版　2003年
徳永哲也編著　『福祉と人間の考え方』　ナカニシヤ出版　2007年
徳永哲也ほか編　『いま、生と死を考える』　郷土出版社　2002年
『いのちの対話――ふたたび生と死を考える』　郷土出版社　2006年
高橋哲哉　『靖国問題』　筑摩書房　2005年
『国家と犠牲』　NHK出版　2005年
『「心」と戦争』　晶文社　2003年
橋田幸子　『覚悟――戦場ジャーナリストの夫と生きた日々』　中央公論新社　2004年
酒井啓子　『イラクはどこへ行くのか』　岩波書店　2005年
『イラク戦争と占領』　岩波書店　2004年
岡本三夫　『平和学は訴える』　法律文化社　2005年
岡本三夫ほか編　『平和学のアジェンダ』　法律文化社　2005年
アルフォンス・デーケン　『よく生きよく笑いよき死と出会う』　新潮社　2003年
アルフォンス・デーケンほか編　『<突然の死>とグリーフケア』［新装版］　春秋社　2003年
浜田寿美男　『「私」とは何か』　講談社　1999年
藤本豊ほか編　『よくわかる精神保健福祉』［第2版］　ミネルヴァ書房　2007年
小沢牧子　『「心の専門家」はいらない』　洋泉社　2002年